

## 謝冰心の「我請求」をめぐる

岡田祥子

### 一

謝冰心（一九〇〇〜）に「我請求」という短い文章がある。この文章は、中国の教育界が直面している深刻な事態のレポート『神聖憂思録』<sup>(1)</sup>（以下『憂思録』）を読んだ冰心が中国の公民一人一人に、「『憂思録』をぜひ読んで、よい方法を考えて下さい」と、涙を混えて懇願するもので、『人民日報』に掲載されると、中国各地の新聞、雑誌が相次いで転載し、大きな反響を呼んだ。<sup>(2)</sup>とりわけ教育の現場からの声は大きく、中央当局もその対応に苦慮し、急遽、後述するように、幼小中学校教師の給与を、十パーセント引き上げることと決定するなど、教育改革を迫られる結果となった。

冰心は、「我請求」冒頭部分で、『憂思録』を読んだきっかけと動機を次のように述べている。

私は毎日何冊もの文芸出版物を受け取りますが、たいいていものは、そこそこに目を通すだけです。ただし、『人民文学』に関しては、比較的好いねいに見ます。第九期が送られて来た時、第一編の作品のタイトルとサブタイトルを

謝冰心の「我請求」をめぐる

見て、ハッとしました。タイトルに引かれて、読み始め、読みふけり、読んでいくうちに涙が雨のように流れ落ちました。……。私はこれまでずっと小中学校教師のすべてのことを気にかけていました。私は自分で見聞きしたわずかな事実に基づいて、「万般皆下品……」<sup>(4)</sup>という小説を書いたことがあります。婉曲に、間接的に、一助教授の不運に触れるものでした。この「速成の作品」は、すんでのところで、印刷機からはずされてしまうところでした。それは、私の六十年の創作活動で出会った初めての「挫折」でした。「上層部」からの通告があつて、刊行物でこの種の問題を語ってはいけないということでした。<sup>(5)</sup>原稿を整理する編集者が、これは小説であつて、報告文学（ルポルタージュ）ではないのだから載せてもかまわないではないかと理を説いてかけ合つてくれ、刺激的なところを何か所か書き改め、削除して、やっとどうにか掲載となったのです。こんな経験があつたものですから、勇敢な報告文学の二人の作者と、『人民文学』の全編集者の方々に、心からの敬意を表さずにはいられません。

冰心が初めての「挫折」といつている「万般皆上品……」は、一九九一年四月、北京の作家出版社から出版された『冰心近作選』に収録されており、その執筆の時期は一九八七年七月十三日である。つまり、「万般皆上品……」が書かれたのは、冰心が「我請求」を書くわずか三ヵ月前であつた。筆者が直接冰心から聞いた話によると、「万般皆上品……」は、『北京晚报』副

刊に掲載されたのが最初で、転載は、『冰心近作選』が初めてだということであった。

「万般皆上品……」というこの短い小説は、双生児兄妹の父親でもある助教授のモノローグで構成されている。そのあらましはこうである。

兄妹は、父親の言うことを聞き入れて大学を受験したが、合否が判明する前に、大学へ行くことをあきらめる。兄はタクシーの運転手に、妹はホテルの従業員になるつもりだ、と言う。二人の収入は父親よりずっとよいはずで、彼らが、大学へ行かないのは、一家が少しでもよい暮らしをするためだし、お金を稼ぐのは、母親の病気をちゃんと治したいからだ、と考えている。最後には、父親も感嘆してしまう。子供たちは家計のためになんと現実的な解決策を思いついてくれたことか。まことに「万般皆上品。唯だ読書の低き有るのみ」ということがあるうか。

「万般皆上品……」は、冰心がこれまで書いてきた作品とちがって、本当に書きたいと思ひ、書かねばならないと思ひ、書き上げた作品であったから、中央当局の介入により書き直させられ、削除させられての挙げ句の掲載は、冰心の作家としての誇りが傷つき、悔しく、悲しかったので、この経験を『初めての「挫折」』と言っているのだろう。

初めての挫折を経験した冰心の老いた心が、挫けそうになっていた時、たまたま手にして読んだのが、「上層部」から止められている教育問題を扱ったレポートの『憂思録』であったか

ら、冰心は、二人の作者の勇氣と、『人民文学』の編集者たちの勇氣に強く打たれ、励まされたのである。さればこそ、読後ただちに「我請求」を書いて、作家と編集者に心からの敬意を表したのである。

冰心は、「我請求」の中で、「万般皆上品……」を書いたのは、「これまでずっと、小中学校教師のすべてのことを気にかけていたから」と言っているが、彼女は、何時頃からそのような気持ちを抱き始めたのだろうか。

台湾の中華民国七十七年（一九八八）五月五日付『聯合報』副刊に、張自強という一記者が、「冰心晩年の景況」というタイトルの探訪記を書いている。彼は、冰心について次のように言う。

冰心は一九〇〇年生まれである。彼女は自らを称して、「私はこの世紀と同じ歳よ」と言う。四十年来、彼女はずっと鬱積する思いを、仕方なく心の奥底に閉じ込めて来たのだ。

四十年前といえは、知識分子（当然教師も含まれる）の社会的地位が低下して行くきつかけとなった百花齊放、百家争鳴の提唱から、反右派闘争が起った時期である。冰心は、自らもよい教育を受け、三十年代、教師が社会的地位も高く、待遇もよく、人が羨やむ職業であった時、教師をしていたこともあり、成長した二人の愛娘も教職にあることから、教育への関心は、ひとしお深いものがあるのだろう。とはいえ、冰心が、五十年代後半から七十年代後半までに発表した作品は、子供が主

人公であつたり子供に語りかけるなど、文章は平明、清新で美しく、作者のやさしい人柄がそのまま偲ばれるようなものが多いが、社会的問題意識の高い作品はあまりなく、教育に触れる内容のものは、一篇もない。

作家蕭乾（一九一〇〜）は、先の張自強の書いていることを、もっと具体的に語っている。<sup>(?)</sup>蕭乾と冰心は、現在でも、お姉さん、「餅干儿」（蕭乾の小学校時代のニックネーム）と呼び合い、七十年間、その交流は、片時も途絶えることなく続いて来た仲だということだ。

五十年代からずっと七十年代を通して、冰心姉さんは、他の多くの知識分子と同様に、指導部の指示のままに動き、一本のネジくぎとなり、一つの便利な道具となることだけを願ってきた。一九六九年、冰心姉さんは、もう年をとって何もできないのに、なんとと言われるままに湖北の農村に下放して、労働鍛練に従事した。彼女は、咸寧文化部五七千校四五二高地第五連隊で、優れた労働によって表彰された。一九七〇年のある日、大隊長が会合の席で、彼女の労働がいかによかったかとほめた時、私は聞いていて何とも言えない気持ちだった。

このようにこれまで指導部の指示に忠実であつた冰心が、八十六歳という高齢になつてから、当局の指示に反するような教育に触れる内容の小説を書いたことについて、蕭乾は晩年に至つた冰心が非常に元氣だと驚きながら、

八十年代の冰心姉さんは歳は九十になろうとし、手足も不

謝冰心の「我請求」をめぐる

自由になつてしまつたのに、すでに獲得した榮譽に甘んじることなく、片時もペンを休めようとしなない。彼女は、「寄小読者」や「超人」にも劣らぬ世を驚醒させるような重要な作品を書いている。たとえば、「我請求」、「万般皆上品……」、「介紹三篇小説和三篇散文」や、「孩子心中的文章」序」等々。彼女は声を張り上げ、力の限り、小中学校教師に代わつて叫び、少しも恐れることなく、「文革」を糾弾する。

と述べているし、『聯合報』の張自強も、

冰心は、ここ数年、老いてますます若返り、自らペンを持ち、毎週作品を発表しているようだが、その内容はかなり辛辣だ。

と記す。二人の記述から、八十をとうに過ぎた冰心に、何か大きな変化があつたと推測される。

三たび『聯合報』を引用する。

冰心は、か細い声で私に言った、「私は若い頃、書いたものを発表する勇氣がなかったの。私はもうすっかり年をとつたわ。書きたいことを書かなければ、時間がなくなつてしまふかもしれないわ。……。それに今は以前より開放的になつたような気がするのよ」と。……。私を見て彼女は背筋をピンと伸ばしてこう言つた、「私はもうこんなに年をとつたんですもの、恐れるものは何もないわ、言うべきことは、私は絶対に言うつもりよ」と。

冰心がなぜこれほどまでにはっきりと自分の意志を張自強に

伝えたのか、真意は測りかねるが、冰心がしきりに自分の年を気にしているところから推測するに、「万般皆上品……」を書く前年、一九八六年三月四日の丁玲の死は、大きな衝撃であったようだ。<sup>(8)</sup> 丁玲は、一九〇四年の生まれであり、彼女が文壇にデビューした二十代後半からの友人である。二人が好むと好まざるにかかわらず、人々はどちらか一方を語る時、必ずもう一方を引き合いに出した。同世代のよきライバルでもあった、友人を失った冰心の悲しみは、想像するに余りある。自分も何時生を終えるか知れないのだ、作家としてのこれまでの自分を振り返った時、とりわけ、五十年代から丁玲を失うまでの四十年の作家としての人生を、丁玲のそれに引き較べた時、悔やまれるものが多々あったのであろう。

若い頃、書いたものを発表する勇氣がなかったと言っても、次々と作品を発表して来たではないか、だとすれば、やはり中央当局の規定に反してまでも書けなかったのだと解すべきであろう。言い換えれば、ずっと氣にかけていた、教育問題を取り上げて論ずることは、勇氣がなくて、できなかったのだ、と言っているのである。

冰心が張自強に、今は以前より開放的になったような氣がする、と言ったのは、冰心の心の底からの実感にちがいない。蕭乾も、「八十年代は、これまでのことを改め、考え直す時代である。形勢は必ずよくなっていくはずであり、万一の危険を心配することも、生き方に口出しされる恐れもなくなるだろう」と述べている。冰心も蕭乾と同じ感慨を抱いていたにちがいない。

い。

八十年代に入ってから中国の經濟の活性化は、若者たちを少しでも待遇のよい職場へと目を向けさせ、わざわざ大学へ行って、安い給与の、かつ社会的地位の低い教師になりたいと思う者などいなくなったとしても不思議ではないし、現に教師を勤めている者でさえも、あの手この手の策を弄して転職しようと駆けずり回るようになった。

冰心は、大陸の知識分子が人材としてそれにふさわしい場に用いられていないこと、専門職にある者が等級によって不当に低く扱われていること、給与は長期にわたり据え置かれたままであること、居住条件も少しも改善されていないこと、健康状態が極めて劣悪であること等々を張自強に語り、一模範教師の話を聞いたことがきっかけで、「万般皆上品……」を書いた、と語っている。<sup>(9)</sup>

教師たちは、一年に一冊のノートと二本のボールペンしか支給されません。授業する時、白墨で字を書くのだから非常に氣を使うのです。一たびそれを使い終わってしまったら、その後どうやって学生たちに教えたらいんでしょうか。

武漢には、二百余り小中学校があるというのに、鉄棒のある学校は一枚もないし、トラックのある学校はたった一校しかないんですって。

しかしながら、この程度の話を聞いたことがきっかけとなって、冰心が「万般皆上品……」を書いたとは思えない。直接の

きつかけとなったのは、おそらく、「北京で、師範学院に応募する学生がいなくなった」<sup>(10)</sup>というニュースを耳にしたからである。この時こそ、冰心にとって、四十年間仕方なく、心の奥底に閉じ込めて来た思いを、吐き出す時だったのである。以前より開放的になったようだし、何より自分には、もうあまり時間はないのだ、躊躇はしてられないと、「万般皆上品……」を書いた。

## 二

冰心が、「万般皆上品……」を書いた時の経験を初めての挫折だと言うのなら、「我請求」の時は二度目の挫折だと言える。冰心が「我請求」を書いたのは、一九八七年、十月十日の早朝であった。それはその日のうちに、『人民日報』に届けられた。即刻発表してもらいたかったからである。ところが『人民日報』が掲載したのは、それから一ヵ月後の十一月十四日であった。この一ヵ月余り、冰心の原稿は、『人民日報』でどのような扱いを受けていたのだろうか。

『憂思録』の作者はもとより、掲載した『人民文学』の編集者も、誰一人として、それが、そんなに大きな反響を呼ぶものとは予測もしなかった。ところが、一たび発表されると、その反響は大きく、たちまち北京から地方へと広がっていった。この大きな反響を押さえ込もうと、中央当局が躍起になって、取材したのは誰か、取材に応じたのは誰なのか、一人一人を徹底的に追跡し、彼らに取材の事実と、取材内容の真偽を問い正し

ていたちょうどその時、冰心の「我請求」が、『人民日報』に持ち込まれたのである。

調査の結果、『憂思録』が取り上げている内容は、すべて真実であると判明すると、中央当局は、『人民日報』に対し、冰心の文章を処分してしまうよう、秘かに指示した。<sup>(11)</sup>

十一月七日、『人民文学』は、『憂思録』の大きな反響に答える意味で、一つの座談会を催した。<sup>(12)</sup>しかしこの会は、開催中に中央当局に踏み込まれるかもしれないという張り詰めたふん囲気の中で行われた。この会が開かれていることを聞きつけた冰心は、身内の者に、「我請求」のコピーを持って行かせ、『人民日報』はこの文章を受け取っておきながら、一か月近くも放置したままで掲載してくれないと言わせた。この時の冰心は必死だったのである。『憂思録』出版の直接の責任編集者、高遠がそのコピーを読み上げると、その会の出席者全員が驚いた。冰心が『憂思録』を絶賛する文章「我請求」を書いていたことを初めて知り、冰心の教育に対する思いの深さに感動したからである。出席者の中には、「もし中央当局が、冰心の文章を非難するようであれば、我々は、即座に、我々の周辺にある『憂思録』以上の悲惨な事実を持ち出して証言しよう」と言い出す者までいたほどであった。

その三日後、趙紫陽総書記が『憂思録』<sup>(13)</sup>反響の実態を把握するために、党外人士座談会を招集した。その席で、趙紫陽は、「教育経費の伸び幅を他の財政支出の伸び幅より大きくすることや、教師の待遇を要求に応じて引き上げることを考えてはい

るが、当面は波及する問題が非常に多く、実行に移すことはできない」と述べ、出席者の不満をかった。

後日、この講話を知った冰心は、「このような考えの指導者の下では、わが国の教育経費の国家財政予算に占める割合が極めて少ないのは当然です。このまま二十一世紀を迎えたら、中国ははてしない広大な砂漠と化してしまおうでしょう」と言って失望した。<sup>(14)</sup>

その会の出席者の中に、先の『人民文学』の主催する座談会に出席した人がいて、冰心が『憂思録』を絶賛する文章を書いているのに、『人民日報』は放置したまま掲載していないと言出し、騒然となった。そこで、代表者が、「我請求」という文章の存在を、手紙で趙紫陽総書記に知らせることになった。

それを受け取った趙紫陽は、これ以上「我請求」を差し止めて置くことはできないと判断し、『人民日報』に掲載するよう指示したのである。かくて十一月十四日（『海外版』は十六日）、「我請求」は一ヵ月ぶりに掲載された。中央当局の懸念は的中し、読者の反響は非常に大きかった。

『憂思録』や「我請求」の反響の大半は、作者や編集者に感謝するものであったが、そのような作品が世に出ることを潔しとしない意見も中にはあった。<sup>(15)</sup> 反対意見は、少数ではあるが、一般読者の中にも、教師の中にもあったのは事実である。とはいえ、反響の多くは圧倒的に、『憂思録』や「我請求」を支持するものであったから、反響がこれ以上広がるのを恐れた中央当局は、「我請求」が掲載されるとまもなく、幼小中学校教師

の給与を十パーセント引き上げること、折から開かれていた中国共産党第十三届全国代表大会で決定した。

一方、冰心は「我請求」掲載後の反響の大きさに喜びはしたものの、掲載までの一ヵ月以上、原稿を放置されたことに対し非常に立腹し、今後『人民日報』は読まないと秘かに心中に誓い、実行していたが、翌八八年六月、『人民日報』創刊四十周年にあたって、書かれた祝辞の中で、「我請求」掲載を感謝して、次のように述べている。<sup>(16)</sup>

『人民日報』創刊四十周年に際し、私は心からの感謝の意を表さずにはいられません。……。四十年この方、私に文芸欄紙上で、その時々私の喜びや悲しみを書かせて下さったことを。……。しかし、私が最も感謝しているのは、やはり、あの、一九八七年十月十日にちゃんと書き上げてあったのに発表していただけなくて、やっと十一月十四日になって発表していただいた「我請求」です。私は、ほとんど毎日のように、小さな読者から一、二通手紙をもらいます。それは、子供たちが教科書で、「寄小読者」や「小橘灯」を読んだ感想です。私の作品に対して、大人の読者から最も反響のあったのは、あの「我請求」でした。手紙を数十通ほど受け取ったでしょうか。それを書いてくれた人の多くは、教師ではありませんでした。彼らも私の意見に同じ思いを抱いていたのです。

もし『憂思録』との出会いがなければ失意のうちにその生を終えていたかもしれない冰心の、晩年になってからのこの一連

の出来事は、その後の冰心を強く、大きく変えた。蕭乾は、「彼女は、取るに足らない文章は書かない、彼女の文章は長くはないが、中身があり、人民のためにものを言い、生き方に干渉する者があれば、立ち向かうものである」と述べているし、舒乙も、『冰心近作選』巻頭の作者小伝の中で、「彼女の創作は、八十五歳を過ぎて新しく高潮期に入った」と述べている。

冰心は、「我請求」を発表してから現在まで、教育問題に関しては、まとまった文章を一篇も書いていない。<sup>(17)</sup>しかし、冰心の二女吳青が書いた「冰心最関心の几件事」の中で、「母が特に関心を抱いているのは、教育である。母は、ずっと中国教育を発度させるため叫び続けている。明日の教育の重要性を説くため、様々な形の文章を書いてきた」と述べているように、冰心は、まとまった文章こそ書いていないが、「言うべきことは、必ず言う」との決意をいっそう強くし、教育政策に真剣に取り組もうとしない指導者に向かって折々苦言を提している。<sup>(18)</sup>

しかし、どんなに書いても、叫んでも、教育政策は、冰心が期待するほど改革されないの<sup>(19)</sup>で、「私は教育問題について語っているのに、何の成果も現れない」と、がっかりするが、冰心は、残りの人生は、教育問題を論じること<sup>(20)</sup>に専念すると決めているのだ。

私は、書いても無駄だとはっきりわかっているんです。でも、私の老いて今なお死なずの心が、大声で、無駄でも書けと私を責め立てるのです。私が書いたものを読んでくれる人がいるか、いないかは別問題です。<sup>(20)</sup>

謝冰心の「我請求」をめぐる

九十三歳の冰心は、今は入退院を繰り返しているそうだが、命ある限り、中国を愛し、中国人民を励まし、中国の将来を案じ、教育を語り続けるはずである。

#### 注

(1) 『人民文学』一九八七年、第九期に掲載。蘇曉康、張敏作。サブタイトルは、「中小學教育危境紀実」

(2) たとえば、一九八七年十一月二十八日、『中国新聞』。同年十二月四日、『大公報』。同年十二月十三日、『文匯報』。八八年二月二十三日、『羊城晚報』。同年五月五日、『聯合報』等々。

(3) 特に顕著なものとして、八十七年十一月二十七日、北京市朝陽区新源里三中語文教師張心願は、天安門広場で、自費でコピーした『憂思錄』、「我請求」を行き交う人々にくばり、中央当局を硬化させた。

(4) 冰心の「我請求」の原稿では、「万般皆上品……」となっていたのに、『人民日報』側で、印刷上のミス<sup>(19)</sup>を犯し、上を下にしてしまったということである。もともと、冰心が、「天子重英豪 文章教汝曹 万般皆下品 唯有讀書高」という旧詩の三句目から題名をつけ、風刺小説であることから、下を上にしたためである。その後転載された「我請求」の中では、全て「万般皆下品……」となっている。

(5) 筆者がこの点について、一九九二年二月二十八日、作

者張敏に確かめたところ、そのような規定はなかったと思うが、私たちのような小作家と、冰心ほどの大家では、社会に与える影響が違うから、あるいは冰心にはあったのかもしれない、と答えてくれた。

- (6) 一九九二年三月一日、北京市海淀区中央民族学院教授様に彼女を訪ね会見した時の談話。

- (7) 復印報刊資料『中国現代・当代文学研究』（一九八八年第七期 中国人民大学書報資料中心発行）所収の「能愛才能恨——為《冰心文学創作生涯七十年展覽》而作」による。

- (8) 一九八六年三月七日執筆の「悼丁玲」による。『冰心近作選』（一九九二年『作家出版社』）に収録。

- (9) 一九八八年五月五日付け『聯合報』副刊、「冰心晩年の景況」による。

- (10) 北京師範学院教授、張寿康（一九九一年、八月死去）の話によると、北京師範学院では、七十年代後半から第一志望の応募者が減り続け、八六年には一人もいなくなってしまったということだ。

- (11) 元西城区教育局長の作者張敏に宛てた手紙による。

- (12) 『文藝報』が、一九八七年十一月四日、「一篇発人深省的報告文学 北京中小學教師座談『神聖憂思錄』」の見出しで掲載する。以下会の詳細な様子は、その会に出席した作者張敏が筆者にくれた一九九二年、四月十七日付け手紙による。

- (13) 一九八七年十一月十五日『人民日報』が「趙紫陽在中共中央邀請党外人士」の見出しで掲載。

- (14) 冰心二女吳青の「冰心最関心の几件事」による。

- (15) たとえば、「機密情況匯編」第五九八期（『人民日報』編印一九八七年十一月二十八日）、同じく第六〇〇期（同年十一月三十日）等は、『人民日報』内部にあった強い批判の声を掲載することを意図して発行されたものである。

- (16) 「我感謝——『人民日報』創刊四十周年感言」は、『冰心近作選』（一九九一年『作家出版社』）に収録。

- (17) 『散文』海外版第七期、「專家作家談報錄」に掲載。

- (18) 『人民日報』一九九二年十一月二十一日の副刊、及び、四川省で七ヵ月にわたる教師の給与不払いについて発言した「天津老年報」一九九三年三月十八日の記事（後に『文摘報』に転載）。

- (19) 「開卷有益」という題名で、『散文世界』一九八九年第十期上に掲載。

- (20) (19)に同じ。